

じょうもんじだい

縄文時代の土器と住居

寒冷な気候であった日本列島の旧石器時代も約 15,000 年前には、世界的に温暖化し自然環境の変化が到来したようです。縄文時代は約 13,000 年前～約 2,400 年前まで約 10,000 年以上も続きました。人々は定住化し、石器・木器・骨角器もつき こっかくきに加えて初めて「土器」が加わり、土をこねて加熱して成形した容器に食料を貯蔵し、煮て食べる生活様式の変化がもたらされました。狩猟・採集・漁労の生業が高度に成熟した縄文文化じょうもんぶんかの到来です。

広川町では、平成 8 (1996) 年に調査された『久泉遺跡』ひさいずみいせきにおいて町内ではじめての縄文時代晩期 (約 3,000 年～2,400 年前) の堅穴住居跡たてあなじゆうきょし けん 1 軒が発見されました。長円形の平面形で、径 3～3.5m の規模。住居内からは同時期の土器がまとまって出土しました。完全に復元できるものではありませんでしたが、盛り付け用の有文鉢・ボウル状鉢、煮炊き具の有文深鉢・無文深鉢など、当時さまざまな器うつわがあったことがわかります。その後、縄文晩期の埋甕うめがめが、平成 23 (2010) 年に調査された『広川高長遺跡』ひろかわたこさいせきで出土しました。台地の縁辺部に埋められた深鉢は、縄文時代の祭祀行為さいしを考える上で貴重な資料です。町内には、未だ土中に縄文文化の痕跡いまが残されていることが明らかとなりました。



埋甕として転用された深鉢 2 個体



縄文時代の堅穴住居